

旧沼東小学校円形校舎の設計図面

沼東小学校の沿革

戦後の石炭増産に伴う炭鉱従業者数の増加とベビーブームにより、昭和 30 年代前半、美唄市の子ども数は急激に増えた。人口は昭和 31 年 4 月に 92,150 人でピークとなり、児童生徒数は昭和 25 年と同 35 年の比較では、小学生が 18.9 パーセント増、中学生が 15.9 パーセント増となり、学校数は昭和 25 年度から 10 年間、小中合計で 32 校と、最多の時期を迎えた。そのため、各学校の校舎は、増築や改築を重ねることとなる。

美唄市児童生徒数の推移

年 度	小学校在籍児童数（人）	中学校在籍生徒数（人）	合計（人）
昭和 25	13,139	5,749	18,888
26	13,070	5,628	18,698
27	13,060	5,594	18,654
28	13,045	5,700	18,745
29	13,285	6,085	19,370
30	14,043	6,361	20,404
31	15,112	6,495	21,607
32	15,790	6,160	21,950
33	16,514	5,866	22,380
34	16,501	6,045	22,546
35	15,619	6,663	22,282

『美唄市百年史 資料編』から作成

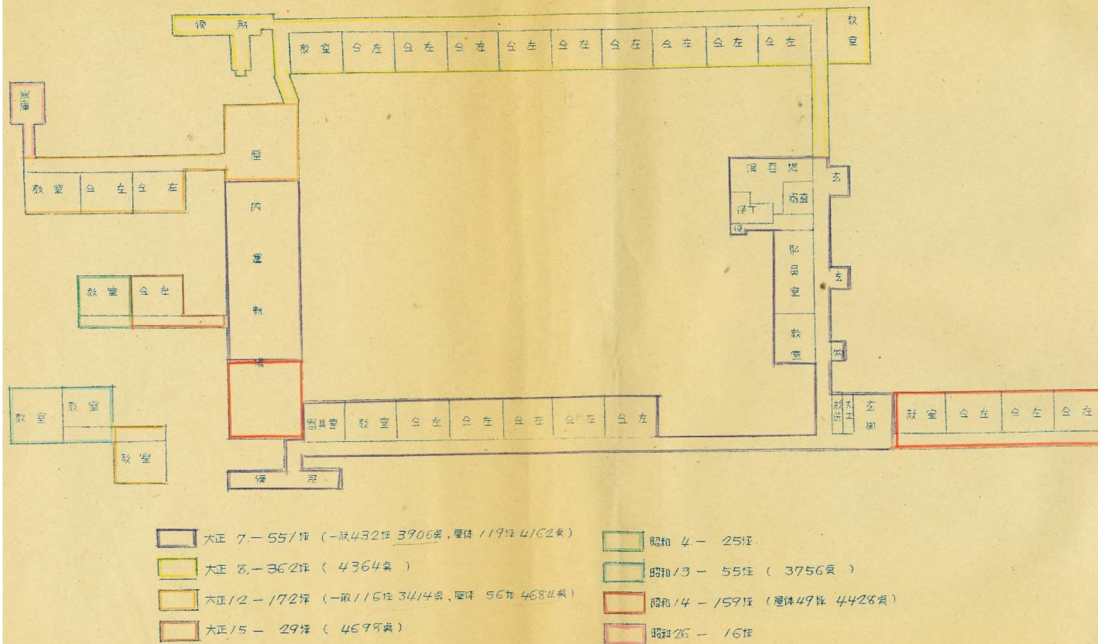
三菱美唄炭鉱周辺には、常盤小、沼東小、栄小、旭小、我路小、沼東中、常盤中の小学校 5 校、中学校 2 校があった。

沼東小学校は、明治 39 年 10 月 3 日に盤の沢簡易教育所として開校。大正 3 年に我路尋常小学校、同 7 年に沼東尋常小学校、昭和 22 年に沼東小学校と改称。大正 9 年には、旭台に分教場が新設され、昭和 12 年に旭小学校として独立校となる。本校校舎は大正 7 年 6 月に我路の沢に新築移転。高等科も併設され、児童数の増加に対応して、大正 8 年、12 年、13 年、15 年、昭和 4 年、13 年、14 年、18 年、26 年と増改築を繰り返し、校舎は継ぎ足され、複雑な形状となっていた。

一方、学校用地は、東西を山に挟まれた谷間の狭隘な場所にあった。大正 8 年の増築時には、落合沢川をはさんで 10 教室をつくり、既存校舎とは、川をまたいで 2 か所の渡り廊下でつなぐという特殊なつくりになった。「山あいの深い谷の奥から流れてくる清流が校舎の廊下の下を流れていた」（高等科 7 期）、「他では見られない校庭に川が流れ、水害で校舎が泥で埋まった」（高等科 16 期）など、閉校記念誌の中で語られている。木造家屋の耐用年数は、22 年から 30 年とされているが、最初期の校舎は昭和 30 年初頭には築 40 年近くなり、雪害や凍害なども追い打ちをかけ、老朽化が相当進んでいた。保護者や学校関係者からの校舎建替えの声は、次第に切実なものになっていった。

改築前の校舎の配置図

市立沼東小学校々舎現況平面図



改築前の沼東小学校校舎の写真 (昭和 33 年頃)



- 写真 1：校舎の基礎は塚石。手前はグラウンド。
 写真 2：校舎のすぐそばに山の斜面が迫っている。
 写真 3：校舎手前には川が流れ、奥には川をまたいだ渡り廊下が見える。
 写真 4：老朽箇所の改修のためと思われるたくさんの資材が積まれている。
 写真 5：屋根は桎葺き、煙突には土管が使用されていて、かなり傷んでいる様子がわかる。

我路小学校との統合

我路尋常小学校は、前述のように大正 3 年に盤の沢簡易教育所から盤の沢町滝の上に新築移転したが、翌年、我路町菊水に再度、新築移転、大正 7 年、校名を沼東尋常小学校と改称し、我路の沢に移転することにより、発展的に解消した。しかし、我路地区住民の熱望により、同年、我路尋常小学校として元の場所で復活、開校した。昭和 9 年に盤ノ沢分教場設置、昭和 21 年、分教場が独立し、盤ノ沢国民学校となる。同年、我路国民学校に高等科併置。昭和 22 年、我路小学校と改称。昭和 29 年に我路町新町へ新築移転。

この頃から統合の話が出てきて、地元の反対の動きは、町民大会（昭和 35 年 4 月 24 日）、住民大会（同年 10 月 16 日、12 月 18 日）、住民投票（同年 12 月 25 日）、住民大会（同 36 年 1 月 29 日、3 月 5 日）など曲折を経て、最終的に沼東小との統合が決定。同年 3 月 26 日、閉校式を迎える。閉校時の我路小学校の児童数は、6 学年で 457 人だった。

三菱美唄炭鉱の動き

炭鉱地域にあった学校は、多くは炭鉱会社からの寄付を受けて校舎等を整備している。

大正 7 年の沼東尋常小学校の新築も「三菱美唄炭業所寄附」だった。翌年の増築、翌々年の分教場新設・奉置所¹ 新設、昭和 31 年の屋体ステージ新設も同様に会社からの寄附によるものであり、従業者の子弟が通う小学校に対して、大きく貢献をしていた。

国の石炭政策に関しては、昭和 25 年に石炭合理化三カ年計画が示され、スクラップ・アンド・ビルド方式（非能率炭鉱のスクラップと能率炭鉱のビルドを中心とする生産体制の近代化）による石炭産業の合理化政策が進められていく。

三井美唄炭は、昭和 38 年 2 月の会社からの閉山提案に対し、労働組合は反対闘争を繰り広げるが、6 月に労使妥結、閉山を承認、7 月 27 日閉山式を迎えた。

一方、三菱美唄炭では、在籍従業者数が昭和 23 年の 7,710 人から徐々に減少を続け、昭和 30 年には 5,081 人、昭和 35 年には 4,247 人になっていた。昭和 38 年 2 月に会社から人員削減などの再建案が提示され、交渉ののち労使妥結。従業員数は、同年 2,896 人、昭和 39 年に 2,522 人となる。昭和 40 年に新会社美唄炭へ移行、昭和 46 年の三菱大夕張炭との合併を経て、昭和 47 年 2 月、会社からの閉山提案に対して労働組合の閉山阻止闘争が市民ぐるみで行われるが、4 月閉山承認、5 月 11 日閉山式に至る。こうして多くの炭鉱マンが家族とともに美唄を離れていった。

円形校舎の盛衰

昭和 29 年 4 月 27 日の朝日新聞夕刊に「来るか「円形校舎時代」」という見出しが躍った。この記事では、「新学期に入っても、校舎の不足は、学校、生徒、PTA の三者いずれの側からも、依然深刻な悩みの種」という状況の中で、「いまの日本の実情に直結した優秀な特色をもっている」と円形校舎を絶賛。

円形校舎が初めて登場したのは、昭和 27 年の金城高等学校（金沢市）、2 例目が昭和 29 年の山崎学園富士見高等学校（東京都練馬区）である。設計者は、どちらも坂本鹿名夫²。その後、昭和 30 年代に多くの円形校舎が建設され、そのほとんどを坂本が手がけた。

円形校舎の特徴は、前掲記事によると①総工費がク形（四角形）の約半分で済む。②敷地がク形と比べて 2 割少なくてすむ。③教室の形が扇形で音響がよく、黒板が光る心配がない、外壁は全部ガラス張りにすることができ、通風、彩光もよい。④入口は防火扉にして、火災の被害を一教室だけにとどめることができる。便所が 1 か所だけですみ、配管配線が容易。

公立学校の施設に関しては、昭和 28 年に「公立学校施設費国庫負担法」、昭和 30 年に「公立小学校不正常解消促進臨時措置法」、昭和 33 年に「義務教育諸学校施設国庫負担法」が制定され、法的整備が進んだ。また、技術的には、鉄筋コンクリートの材料、機材、工法が飛躍的に発展し、学校施設についても防災・不燃化が求められた時期に当たっていた³。

第 2 次大戦後の復興期における校舎不足とベビーブームによる児童生徒数の激増の中で、比較的低コストで面積効率が良いという経済性と、多くの児童生徒を収容でき過剰収容を解消できるという円形校舎の利点が、この時期、注目される。

しかし、その後、学校施設の整備が進む中で、児童生徒の生活や活動が重視されていき、従来型の「片廊下一文字型校舎」が大勢を占め、経済性を強調した円形校舎の役割は終わりを迎える⁴。

期成会の結成から改築へ

昭和 27 年 3 月、沼東小学校 PTA らを中心に沼東小学校校舎改築期成会がつくられ、具体的な建替えの議論が進められる。市・市議会・市教委への請願（昭和 28 年 3 月）、道教育委への校長・期成会長による要望活動（昭和 32 年 4 月）などを経て、改築への機運は醸成していく。児童数は、昭和 28 年には 1,262 人、昭和 29 年には 1,821 人と増えたが、学級数は両年とも 25 のままで、教室は「すし詰め」の過剰収容となっていた。老朽校舎は、山に挟まれ日照時間も少なく、冬期には凍上、室温が 8 度を超えない日もあるなど厳しい環境にさらされていたため、耐久性と気密性の高い鉄筋コンクリート造の校舎が切望された。

国庫補助や起債など財源の目途が立ち、昭和 33 年度、改築が決まる。9 月、第 1 期工事の円形校舎 A 棟の建築が始まる。以降の工程は次のとおり。

第 1 期工事：A 棟・玄関・渡廊下

着工	昭和 33 年 9 月 14 日	竣工	昭和 34 年 8 月 31 日
構造	鉄筋コンクリート造 3 階建	延床面積	1,816.069 平方メートル
教室	各階とも 6 教室で計 18 教室	建築費	27,999,000 円

第 2 期工事：B 棟

着工	昭和 34 年 9 月 26 日	竣工	昭和 35 年 8 月 31 日
構造	鉄筋コンクリート造 3 階建	延床面積	1,820.85 平方メートル
教室	12 教室、図工室、音楽室、図書室、理科室、放送室	建築費	33,587,000 円

第 2 期工事：管理棟（第 1 次）

着工	昭和 35 年 8 月 17 日	竣工	昭和 36 年 3 月 31 日
構造	鉄筋コンクリート 2 階建	延床面積	409.4 平方メートル
廊下、便所、物置、石炭庫、階段		建築費	12,928,000 円

第 3 期工事：管理棟（第 2 次）

着工	昭和 36 年 8 月 10 日	竣工	昭和 36 年 12 月 30 日
構造	鉄筋コンクリート造 2 階建（一部地階）	延床面積	621.35 平方メートル
給食室、保健室、校長室、職員室、会議室等		建築費	16,090,000 円

第 4 期工事：屋内運動場

着工	昭和 37 年 7 月 26 日	竣工	昭和 37 年 11 月 20 日
構造	鉄骨造	延床面積	618.92 平方メートル
屋内運動場、ステージ、器具室、職員玄関、渡廊下		建築費	11,762,000 円

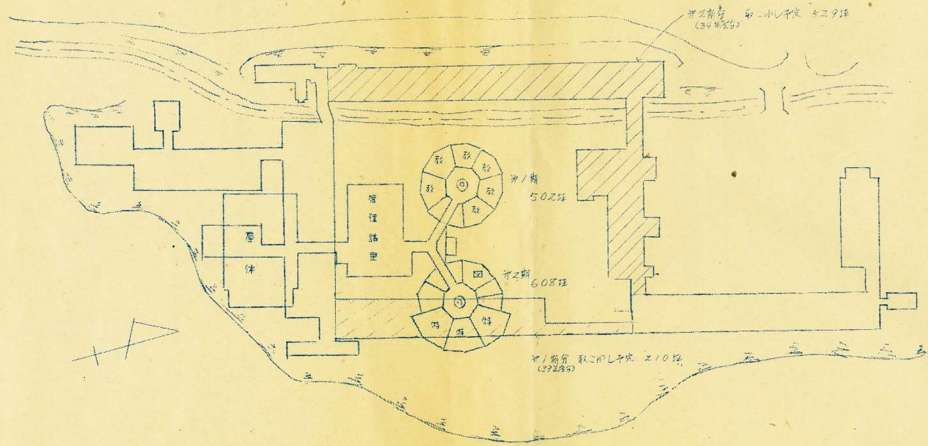
（美唄市都市建築住宅課「建築物検収報告書」より）

昭和 36 年に我路小学校と統合したとき、児童数 1,635 人に対して学級数を 2 年前の 20 から 32 に増やすことができたのは、校舎改築により教室数が増えたためである。

円形校舎は全国に 103 例、北海道内の 11 例のうち 8 例は坂本鹿名夫の設計によるものである⁵。沼東小学校の円形校舎については、設計者が不明のまま、60 余年の歳月が流れた。

改築工事計画図

市立沼東小学校々舎改築工事計画図



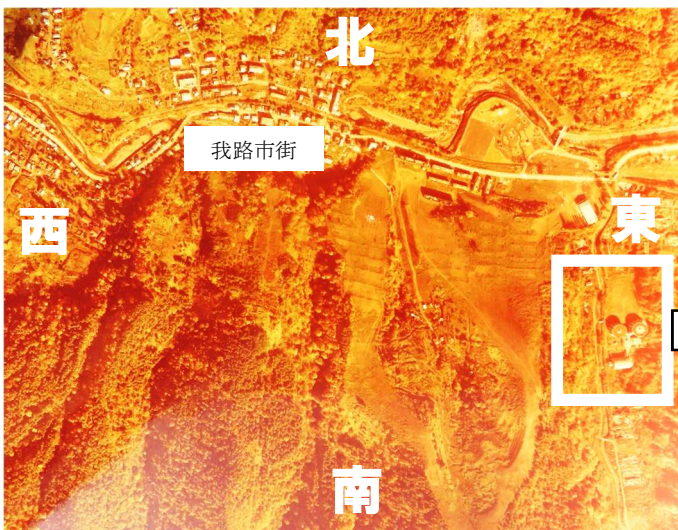
改築校舎の各棟ができる都度、不要となる旧校舎部分を順次、解体する手順で進められた。



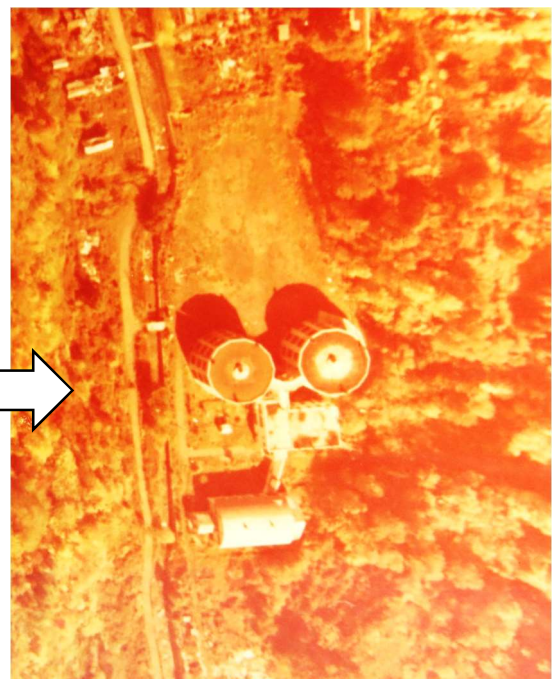
改築後の沼東小学校



改築後の沼東小学校全景



航空写真での閉校後の旧沼東小学校（昭和 51 年頃）



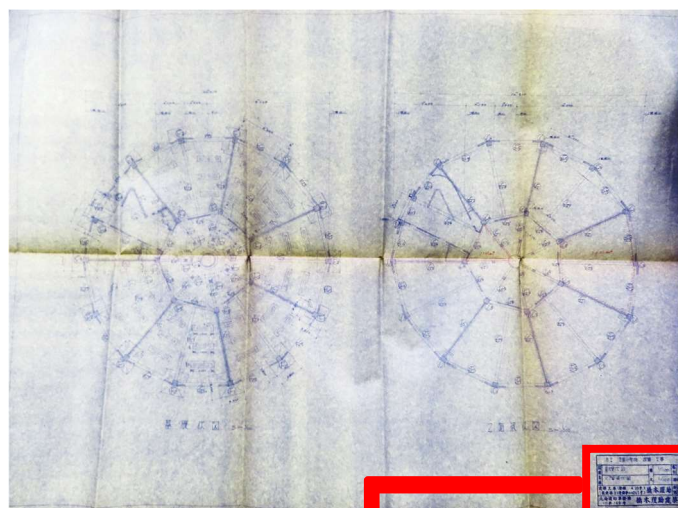
東西に山が迫り、学校敷地の幅は最大で 250m 程度。

設計図面発見！

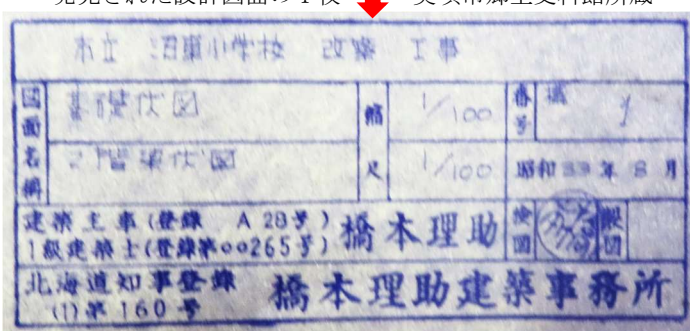
令和4年12月、美唄市郷土史料館の収蔵庫から古い設計図面が見つかった。沼東小学校の円形校舎の設計図面で、一部重複するものを除き、関連資料数は74点。確認した結果、実際の工事に用いられたものとわかり、さらにそこには、設計者「橋本理助 橋本理助建築事務所」と記されていた。橋本理助氏⁶は、札幌市に建築事務所を置いていた建築家。設計を担当した部分は、円形校舎の2棟（A棟、B棟）と2棟をつなぐ玄関・渡り廊下及び管理棟である。整備の最終年度に建てられた屋内運動場は、美唄市が設計している。また、最終設計案のほかに、屋内運動場も円形とする円形3棟案の図面「市立沼東小学校校舎改築計画図」も見つかった。日付は入っていないが、設計を検討していた段階のものと思われる。関連資料の中には、小樽市の石山中学校の学校要覧があり、昭和32年10月竣工の同校の円形校舎を参考にしていたことが伺われる。この校舎は、坂本鹿名夫設計によるRC造3階建と5階建の円形2棟タイプである。中心部の螺旋階段も沼東小学校と共通する。

沼東小学校の校舎改築に当たり、円形校舎を採用した理由や橋本理助氏に設計を依頼した経緯を記したものは、いまのところ見つからない。狭隘な土地に多くの児童を収用できる校舎をつくる必要性から、面積効率の良い円形校舎はその要請に合致したと考えられる。また、道内では昭和32年までに5例の円形校舎ができており、その斬新なデザインは教育関係者のみならず、注目されていたのだろう。

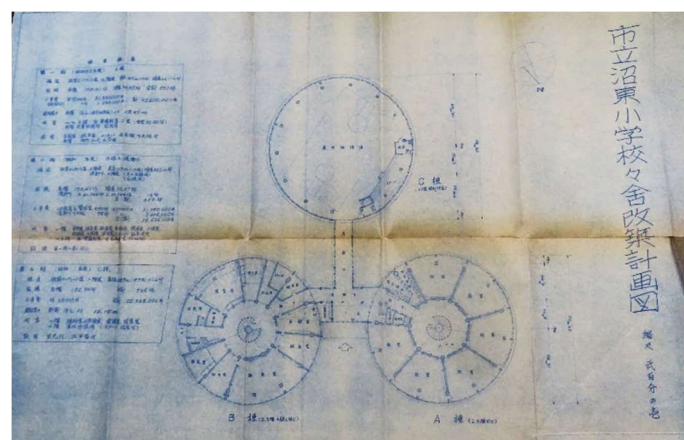
沼東小学校は、三菱美唄鉱の閉山に伴い、児童数が激減し、昭和49年3月に68年の歴史を閉じる⁷。円形校舎は、14年6か月使用されたことになる。現在、解体されずに残る1棟（B棟）は、樹木が生い茂る谷間で廃墟となっている。



発見された設計図面の1枚 美唄市郷土史料館所蔵



設計図面部分（拡大）美唄市郷土史料館所蔵



円形3棟案の計画図。上部1棟が屋内運動場。
美唄市郷土史料館所蔵

美唄市総務課総務係行政資料室 伊藤 敦史
(令和5年2月9日)



B 棟西側（昭和 54 年 11 月撮影）



B 棟南側（昭和 54 年 11 月撮影）



B 棟東側（昭和 54 年 11 月撮影）



右は屋内運動場。後に解体。（昭和 54 年 11 月撮影）

注

- 1 奉置所 奉安殿ともいい、下付された「教育勅語」の謄本と天皇・皇后の「御真影」を奉置した。
 - 2 坂本鹿名夫（1911－1987） 東京生まれ。東京工業大学卒業、大成建設を経て、昭和 29 年（1954 年）建築総合計画研究所設立。昭和 37 年（1962 年）坂本鹿名夫建築研究所設立。円形校舎を提唱し、その設計に関する理論を構築。全国の円形校舎を多数手がけた。
 - 3 「昭和 30 年代に円形校舎が流行した原因に関する研究—昭和 30 年代の円形校舎に関する研究 その 1—」 森山 学 日本建築学会九州支部研究報告第 44 号（2005 年 3 月）
 - 4 「昭和 30 年代に流行した円形校舎が衰退した原因に関する研究—昭和 30 年代の円形校舎に関する研究 その 2」 森山 学 日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）（2005 年 9 月）
 - 5 「北海道における円型校舎について」 三河智子、角幸博、石本正明 日本建築学会北海道支部研究報告書 No. 76（2003 年 6 月）
 - 6 橋本理助（1908－1986） 山形県生まれ。日本大学建築科卒業。東京市役所を経て北海道庁に奉職。建築課長、営繕課長等を歴任。昭和 29 年（1954 年）橋本理助建築研究所を設立。昭和 45 年（1970 年）(株)橋本理助建築研究所代表取締役社長。北海道内の多数の学校、病院、公共建築等の設計監理を手がける。昭和 34 年（1959 年）には、美唄市立峰延小学校屋内運動場新築工事を設計している。
 - 7 三菱美唄鉱周辺の小中学校は、次々と閉校していく。昭和 36 年 3 月我路小。昭和 45 年 9 月旭小。昭和 48 年 3 月常盤小、常盤中、沼東中。昭和 56 年 3 月栄小。
- ※ 使用写真で所蔵場所を記載していないものは、すべて美唄市行政資料室所蔵。

本稿で紹介する美唄市行政資料室の収蔵資料

- ・閉校・閉園記念誌 沼東 美唄市立沼東小学校・幼稚園 昭和 49 年 3 月発行
- ・さかみち 美唄市立我路小学校閉校記念誌 昭和 36 年 12 月発行